
呪われ王子と導きの娘

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われ王子と導きの娘

【Nコード】

N9137Z

【作者名】

麿

【あらすじ】

いつか遠くへ旅することが夢の虚弱な少女、深奈ミナは不思議な翼ある獅子に、ある王子を救って欲しいと言われて召喚された。だが、出会った王子は深奈の力など要らないと言いつち……。この小説は異世界召喚競作企画【テルミアストーリーズ+】参加予定作品です。

つまい話には裏がある (1)

叶う夢と叶わない夢がある。

きつと、自分の願いは叶わないものだ。それでも、もしかしたら何とか出来るかもしれない、奇跡が起こって、この小さな夢を叶えてくれるかもしれないと心のどこかで願っていた。

叶わないと知りながら、諦めきれずにいる自分を馬鹿にしながら、それでも。

冬休みの夜、森深奈^{ミナ}は窓の外に雪が舞い落ちてくるのを見て、立ち上がった。それまでこたつに突っ込んでいた足を引きぬくと、一気に爪先が冷える。それでも深奈は足を止めずにガラスの引き戸を開けると、手を差し伸べた。

ふわり、と雪のかけらが舞い落ちて、一瞬針で刺したような痛みを残して溶け消える。

その様子に、深奈はほほ笑んだ。

「この水はどこから来たのかな」

呟いて、深奈はこたつのテーブルの上に広げた写真誌を見やる。それは、世界の綺麗な自然風景を集めた写真集で、深奈の愛読書のひとつだった。

と言うのも、深奈は小さい頃から体が弱く、年中熱を出して寝込むことが多かったので、あまり外出自体をしたことがない。それは

高校生になった今も変わりない。

アレルギーにも悩まされているし、消化器が丈夫じゃないのか、変なものを食べればお腹をこわす。そのせいで、今まで旅行らしい旅行はしたことがなかった。

学校の修学旅行すら、熱を出して小・中校とも行けなかったくらいだ。

そのため、深奈の夢はいつかこの身体を丈夫にして、写真に載っている場所に行くことだった。

「どこか遠くへ行ってみたいな」

手に次々と舞い落ちる雪片を見詰めながら、ぼつりと呟く。

その時だった。深奈の目をほんの一瞬閃光が焼き、思わず小さく悲鳴を上げて目を閉じる。心臓が早鐘を打つ音を聞きながら、深奈は目を開け、さらに口も開けた。なぜなら、目の前には光に包まれた大きなライオンがいたからだ。

「な、な、何」

不思議と怖い感覚はなかったが、それでもライオンが宙に浮いている姿に、思わず腰が抜ける。床に尻もちをついた深奈の頭に声が響いた。落ち着いた男性の渋い声。

『あなたにお願いがあつてやって来ました。』

私が守護する国では今、ひとりの少年とその家族が苦しんでいます。私の主が唯一消せなかった呪いのせいで、少年はいつか人を食う化け物に変わってしまうのです。

彼は王子であり、失われれば国が混乱し、大勢の人々が苦しむことになるでしょう。

その呪いを解くには、呪いを掛けた銀の竜が眠る地を探さなければなりません。そこは只人には見つけられない場所にあります。私の主と同じこの世界の人間でなければ見つけられないのです。

今、貴女は遠くへ行きたいと願った、だから私は貴女の呼び声に応えた。この頼みを聞いて下さるのなら、私は貴女の最も欲するものを与えましょう」

にわかには信じられない話だった。それよりもまず、目の前で光の粒子を全身にまとい、白鳥のようなまばゆい純白の翼を生やしているオスのライオンが喋っているのだと理解するのに時間がかかった。

「なにこれ、夢でも見てるの？」

『残念ながら真実です。さあ、答えを』

ライオンは問い、ばさりと翼をはためかせる。深奈は、突然訪れた展開について行けずに、どう答えたものか悩む。

「あの、ようするに私が異世界に行って王子様を助けるの？」

『ええ、そうです』

「全部終わればこっちに帰ってこられるの？ 願いは何でもいいの？」

『戻れます。責任を持って戻します。願いごとは私に可能な範囲に限りますが』

深奈は、自分の部屋の本棚に目をやる。そこには異世界へ旅して世界を救った子どもたちの話があり、今の状況がまさにそれだと気づいた。

その上、翼のあるライオンは王子を救う手助けをすれば、願いを

叶えてくれると言っ。

もしかしたら、私の夢が叶う？

「私がそっちに行っている間、こっちでも時間は進んじやうの？
お父さんとお母さんに心配かけたくないし……学校は休めないし」

「それも大丈夫です。あなたを今お連れした場合、今より1分ほど
後のこの場所に戻して差し上げることが可能ですから」

「どのくらい危険なの？」

「あなたに危険が及んだ場合は、私が現れて守ると誓いましょう。
さあ、答えを、王子の呪いは今この時も進んでいるのです」

ライオンは唸り声を上げる。深奈は、もしかしたらこれはこたつ
でうたた寝した自分の見た夢かもしれないと考えた。体が丈夫にな
ることを願うあまり見た都合の良い夢。それなら、もう少しだけ見
ていたい。だから答えた。

「わかった、手助けに行く」

「願いは？」

「旅が出来る丈夫な体が欲しいの。滅多に病気なんかしない、どん
なものでも食べられる体になりたい。それから、色々な場所に自分
の足で行きたい！」

「分かりました、それでは」

ライオンが目を細めた時、深奈の頭を激しい頭痛が襲った。あまりの痛みに気が遠くなる。両手で頭を抱えて、これは何と言おうとしたが、それより先に、深奈は気を失った。

(2)

顔に何か体がこすりつけてくる。ものすごく柔らかくて、くすぐりたい。その何かは、深奈が身じろぎすると、小さなはばたき音をたててどこかへ行ってしまった。一体何だったのだろう、それに人の声が聞こえるような気がする。体は重く、何かとても柔らかいものの上に寝ている事だけはわかった。

「……う」

「おお、目を覚まされましたか、どうです、どこか痛いところなどはありませんか？」

目を開けるなり訊ねられ、深奈はしばらく声を掛けてきた人物を眺めた。ようやく視界が晴れて、頭も働いてくると、深奈はがばつと上半身を起こし、口を開けて目を見開き、呟いた。

「嘘、本当に違う世界に来ちゃったの？」

「はい。ここはテルミアのリオニアという国です。あなた様は今日の午前中に街の広場に光と共に現れました。街の人々がもしや勇者様が再臨されたと大騒ぎし、ここへお連れしたという訳です」

丸い眼鏡を掛け、白衣を着た穏やかそうな中年の男性が、目を輝かせながら言う。

深奈は彼が今言った情景を思い描いて青ざめた。もっとこう、ひっそりと森のような場所に出て、ここはどこ？ 次に何をすればいいの？ と言ったような展開を想像していたのだが、どうやら派手派手しく現れてしまったらしい。

「貴女は勇者様なのでしょうか？ この国が今抱えている問題を解決しに現れたのでは？」

「ええっ！ ちっ違います。私は背中に羽を生やしたライオンに頼まれて、願いを叶える代わりに呪いに苦しんでいる少年を救う手助けをして欲しいって言われて」

「おお！ それはまさに守護聖獣リオノスではありませんか！ この何百年、彼の聖獣の姿を見たものはおらず、もうこの国は見放されたのだと言われてきましたが、やはり見捨ててはおられなかったですね！ 急いでこの事を陛下にお伝えしなくてはっ！ 失礼します」

「え、あの」

聞いてみたい事がたくさんあったのに、医者らしき男性はひとりで大騒ぎすると椅子から立ち上がって凄まじい速さで部屋を出て行ってしまった。

「陛下ああ〜大変ですぞお〜ついに〜導き手があ〜現れましたぞお
お〜っ」

廊下を叫びながら走って行く声が、ゆっくりと小さくなっていく。深奈は何が何やら分からないまま、とりあえずベッドを出る。服装はこたつにあたっていたままで、ダウンジャケットにジーパン姿と言つ色気も素っ気もないものだ。

空気は冷たい。こちらの世界も冬なのだろうか？ と深奈は考えた。

「お、王子様が……！」

深奈は、対面に腰かけた青年の言葉を思わず繰り返していた。その単語を聞いた途端に、頭に浮かんだのは良くある金髪碧眼、白馬に乗ったあんまり強くなさそうな人物のイメージだった。

今深奈がいるのは、城の中にある談話室という場所で、城に仕える者たちが休憩するのに使う場所なのだそうだ。座り心地の良いソファとテーブルが幾つも並び、夏場ならさぞ美しいであろう花壇が見える。今は雪が積もった針葉樹みたいな木が並んでいるだけだが、それでも綺麗だった。

「はい」

青年、ヴェインと名乗った彼は頷いた。

彼は王子の従者で、騎士なのだという。まだ年齢は二十三歳だと言っていたが、妙に威厳たっぷり、もっと年上に見える。重そうな金属の鎧を身につけ、剣を所持しているヴェインは騎士という印象にぴったりの人物だった。淡い茶色の髪は短く、鋭い目は鋼色をしており、体格はかなり大きい。

平均的日本人女性くらいの深奈は見上げなければ顔が見られない程だ。

「ですが、セリク王子は昨日、自分の力で何とかすると仰って、泣き落して衛兵を騙して逃走しましたので、その捜索が終わってからご協力頂ければと思います」

「呪われてる王子様が泣き落としで逃走……ですか」

深奈の考える「王子」とはずいぶんと違う気がする。まあ、王様の息子が王子なのだから、どんな人物であつても別におかしくはない。つい余計な夢を見た自分がちよつと恥ずかしい。

「はい、情けないことに。それで、導き手どのはご協力頂けるのですか？」

「あ、はい！ 何だか良くわかりませんが、健康と引き換えに引き受けちゃつたので頑張ります」

実は先ほどからヴェインによる細かいことの説明を受けているのだが、あまりにそれまでの現実とかけ離れていて実感が全くわからない。けれど、体が軽いことは本当だし、言ったことはきちんとやりたいという単純な思いから深奈は言った。

何より、この世界を旅出来るのだと考えただけでわくわくするのだ。

しかも、ヴェインの話によれば騎士たちの護衛付き。お金はこの国が出してくれるというではないか。こんなに嬉しいことはない。その上、時間は無制限、上手い話には裏があると言うが、今の深奈にはそんな考えは全く浮かばなかった。

「そうですか、良かった。それでは、私は王子を迎えに行つて参りますので」

「え？ 居場所わかつてるんですか？」

「はい。部下に跡をつけさせましたので、今はここから徒歩で一日行った宿場町に潜んでいるつもりです」

まあ、そうだろうなと深奈は思った。こんな凄そうな騎士を出し抜けるとは到底思えない。その時、深奈はふと思いついた。ただの好奇心ではあったが、それでも試してみる価値はある。

「あの、私も一緒について行っていいですか？」

そう言うと、ヴェインは驚いたように目を見開いた。

(3)

吐き出す息が白く凝る冬の正午。

大勢の旅人でにぎわう宿場町の通りを、深奈とヴェインは視線をあちこちにさまよわせながら歩いていた。初めて馬に乗ってきたが、ヴェインがきちんと支えてくれたのでそれほど怖くはなかった。

「ここにいるのは確かなんですよね？」

深奈は改めて訊ねた。ヴェインは頷いてから答える。

「はい。追いかけた部下の話によれば、この町で一泊したものと思われます。この町に入ってから出てきていないことは確かだのとですから」

「じゃあ、出て行っちゃう前に探さなきゃなりませんね。ええと、銀髪に銀の目でしたっけ？」

今朝、ヴェインに説明を受けた時に聞いた内容を思い出しながら深奈は言った。

馬に乗りながら、その話を脳内で懸命に整理してみたのだが、まだ半分もわかっていない。だが、とにかくこのリオニアの第二王子が人を食う化け物になってしまうという呪いに苦しんでおり、そのせいで元々は黒かった髪はくすんだ銀色に変じ、瞳も同じ色になってしまったという部分はわかっていた。

「はい、後嗣たる象徴である黒髪黒眼を失ってしまったので」

彼は深奈の問いに、沈痛な表情を浮かべた。深奈は慌てて言った。

「だ、大丈夫ですよ、きっと元に戻りますからっ」

「ありがとうございます。貴女様が来て下さって本当に良かった」

深奈は期待をこめた眼差しにさらされ、言葉に詰まった。期待されていることはわかるし、そのためにこちらの世界に連れてこられたのだから、役割は果たしたい。と言っても、具体的にどうすれば良いのかはまだあまりわかっていない。ただ、頑張るつもりだけはあった。

深奈は困惑ぎみにヴェインから目を反らす。すると、深奈の目に何かの人だかりが飛び込んできた。どうやら何かで揉めているらしい。

「何でしょう?」

「もしや……! 行ってみましょう!」

「え、え?」

突然ヴェインは何か気づいたように鋭く言うと、深奈の手首をつかんで人だかりに突入した。いきなりおしくらまんじゅう状態になり、息が詰まった深奈は「うぐふ」と謎のうめき声を上げる。しばらく耐えていると、人だかりの先頭に出た。

ようやく呼吸出来るようになり、深奈は大きく息をする。途端、人のどなり声が聞こえてきた。驚いて目を向けると、そこにいた。

「ああ何度でも言ってやるさ、幾らなんでもお前の宿は値段設定がおかしすぎる。」

あんな固い貧相なベッドと風の吹き込む寒い部屋のくせして、暖炉もない、しかも食事は少ないうえに不味い、だというのに一泊銀貨三枚だと？ 銅貨三枚の間違いだろう！」

腰に手を当て、偉そうな調子で店主に向かって説教を垂れる少年。その髪は灰色に近い銀色で、時々あらぬ方向に跳びはねているが、さっぱりと短めに整えられている。顔立ちはすっきりと整っており、偉そうにしても嫌みさがなかった。

「ここは高級宿じゃないんですよ、そのくらい貰わないと運営していけないんです。大人しく代金を払って下さい。それ以上ここでわめくようなら営業妨害として警備兵を呼びますよ」

「呼べばいいさ、そいつらにもここが悪徳宿だと教えてやる！ 俺は絶対に銅貨三枚しか払わない、この宿にはそれ以上の価値はない！」

「……見つけましたよ！ セリク様っ！」

ヴェインが少年に呼びかけた。少年 セリクの目がこちらに向く。ものすごきぎょつとした様子で、悔しげにこちらを睨みつける。

「ちっ、もう見つかったか」

「戻りましょう、貴方にご自分の立場と言うものを思い出させて差し上げます」

ヴェインはセリクに歩み寄ると、上から鋭い目で睨む。深奈は怖いと思いつつ、傍らで不機嫌そうに顔をしかめている少年を眺めた。何と言うか、自分の中にあつた「王子」のイメージが崩れ去る。す

ると、セリクの方も深奈に気づいた。

「そいつは誰だ？ 初めて見る顔だが」

「異界より呼び出された『導きの娘』です。あなた様が城を後にしてすぐにこちらへ現れました。すでにご協力頂けることになっております。ですから、後は我々と彼女にお任せ下さい」

ヴェインが告げると、セリクは「やなことだ」と答えてそっぽを向いてしまった。そこへ、困った様子の店主が割り込んでくる。

「あなたは彼の知り合いですか？ だったら説得しちゃくれませんかね、こっちもいつまでもこうしてられないんですよ」

「ああ、すみません。銀貨三枚でしたら私が払います……これでいいですね」

「ありがとうございました」

ヴェインは懐から金入れを出すと、あっさり支払ってしまった。店主は手のひらに載せられた金の数を確認すると、ヴェインに頭を下げて店の中へ戻って行く。すると、セリクが怒鳴った。

「あっ！ 待てよこの悪徳店主っ！」

「いい加減にして下さい。さあ、行きますよ……どうしても行くと云うのなら、ちゃんと周囲を説得してからにして下さい。こういう事は困ります」

ヴェインはたしなめるように告げると、手を叩く。同時に、人垣

から彼と似た体躯の若者たちが三人現れて、セリクを取り囲んだ。どうやら彼の部下らしい。

「くそつ、覚えてろよヴェイン。俺は絶対に自分の力でこの呪いを解いてやる」

「ですので、周囲を納得させてからにして下さい。そうすれば文句は言いませんよ。さあ、ミナ様も戻りましょう」

「はい」

深奈は頷いて、歩きだしたヴェインとその部下に囲まれたセリクの後ろに続いた。それから、この王子様はどんな人なんだろう、と心の中でこっそりと思っただった。

(4)

リオニア王国首都、クースの中央に位置する王城。

その第一会議室に、王と王妃、第一王子のイーザ、ヴェイン、そして深奈が集まって第二王子のセリクを囲んでいた。椅子に座らされたセリクは不機嫌の見本のような顔つきで一同を睨んでいる。

「これは俺の問題だというのに、なぜ俺が自分の手で解決しようとしちゃいけないんだ？」

「それは貴方が王子だからですよ」

にべもなく答えたのはヴェインだ。

現在、彼は目くらましのための旅装から騎士の正装に戻っており、より威厳を増している。

一方の王子も旅装をとき、元の王子らしい服装に戻っていた。金糸で飾り縫いがされた青の上衣に紺のズボン、首元や袖には繊細なレースがあしらわれ、髪もきちんとかされた姿を見て、深奈はようやく彼を王子だと思えるようになった。

「そうだよ。しかも継承権のない僕と違って、お前はれっきとした王太子なんだぞ？」

ふらふらと一人で出歩いていいような存在じゃない。この国を継げるのはもうお前しかないんだ。この国が翼獅子リオニスの守護を受けられなくなったらどうするつもりなんだ？」

言ったのは第一王子のイーザだった。貴公子然とした優しげな容貌の青年だが、もの言いは結構きつい。セリクと良く似た面差しを

しており、柔らかそうな金の髪と、淡い緑の瞳を持つ。体格はすらりとしており、立ち姿がひどく美しく、深奈にはこっちの方が王子らしく見えた。

「そうですね、この国を建てた勇者の血筋であることを示す黒髪に黒い瞳を持つ者だけが、王位を継承出来るのですから」

「俺はその勇者の子孫だ、だから自分で行く。絶対に譲る気はない」

答えたセリクに、王妃は深いため息をついた。話し合いは先ほどからずっと平行線を辿っており、全く進展を見せない。それを眺めるのに飽きてきた深奈は、話を聞きながら、ヴェインに教えられた話を反芻してみていた。

ここはテルミアという世界のリオニアという国で、王族の祖先は深奈と同じ国から来た少年だったということ。その少年が勇者となつて、聖獣リオノスと共に魔王を倒し、この国を建国したこと。

勇者の伝説はかなり多く、物語として残っているものは全てこのリオニア王国王城の図書室に保管されており、その中の一説に、魔王に力を貸していた魔獣、銀竜ジャフォラと戦った時の話が残っている。それによれば、勇者は銀竜が死に際に放った竜体変化の呪いを受けたが、呪い自体が彼に効かなかったというものがあつた。

だが、その呪いは生きており、勇者の末裔であるリオニアの王族に竜変の兆候が現れはじめていた。現在の王も、息子のセリクが生まれるまでは竜化に怯えながら暮らしていたと言つ。これまでは何とか、天空神ミアの神殿で祈りを捧げることにより呪いを抑え込んできたが、セリクに現れた兆候は今までと異なり、かなり強いものだった。

危惧が事実となり、リオニア王家は悩んだ。

実は、セリクが生まれる前日に『白鴉』アレフゲルダがふらりと城を訪れたことがある。彼は「千古の賢者」「運命の語り部」「来るべき先触れ」「不可避の悪夢」「歩くトラブル吸引器」など、数多の異名を持つ吟遊詩人のだが、一方で予言者という顔も持つ。

彼は出産間近の王妃の側へ現れると、歌を歌った。

内容は、その腹の子には国の存続に関わる試練が課されている。その試練は彼が十二才になった時から始まり、やがて成長した暁には、彼を導く娘が始祖の国より訪れて、光の場所を示すだろう。その試練に敗れたならば、その時こそがリオニアの終焉である。だが、この試練に打ち勝てば、その後のリオニアは長きに渡って繁栄するであろう。

三年後のリオニア歴五百年を祝えるか否かは、全て彼にかかっている、というものだった。

深奈は彼の歌う「導きの娘」の特徴を備えているという。黒髪に紫水晶の若い娘、彼女は聖獣リオノスの導きによってこの地を訪れると歌われており、深奈はまさにそれに合致する。

そう言われて初めてこちらへ来てから鏡を見せてもらった。鏡に映っていたのは、小さな顔に大き目の丸い目、小さい鼻に、内側にカールしがちな癖があるため、セミロングに伸ばした髪をしたいつもの自分だったのだが、なんと、瞳の色が変わっていたのである。

この世界では、瞳の色はその人の持つ気の色を現すのだと言う。紫は「高貴」「穏やか」「好奇心」などを示すと言われてそんなはずはないと思ったが、話の腰を折るのも気が引けて黙っていた。

話はセリクのことになる。王子様というから、ちよつとだけ期待しながら耳を傾けたのだが、聞こえてくるのは「無鉄砲」だの「逃亡癖あり」だの「王族としての威厳に欠ける」だのとといったものばかり。最後に、王子は昨日逃亡しましたと聞かされて、深奈は驚きつつもがっかりした。

そんなセリク王子は、偉そうに（いや、実際偉いのだが）ふんぞり返って腕組みをしつつ、家族と睨みあっている。深奈は考えた。

あの王子を説得出来ない限り、この世界を満喫出来ない。何とかしなければ、と思い、考えにふけるのをやめて、深奈は彼らの会話に意識を戻した。

(5)

それから、深奈は改めて呪われているという王子セリクを眺める。呪われていると言うから、もつと頬がこけてゲツソリしている様子を想像していたのだが、予想に反して王子は元気そのものだ。いや、むしろ元気すぎると言ってもいいだろう。

「大体、俺に何かあったところで、王の椅子だけ空位にしておいて、国の運営は宰相と貴族議会に任せておけばいいだろう。そのうち、兄上の子の中から後嗣の証が現れた者を据えればいいだけの話じゃないか。どの道、このままじゃ俺は死ぬんだ。肉体は魔物になって生きるかもしれないが、セリクという人間は死ぬんだ。」

大体、ここで待っている間に変身したらどうする？俺が家族や国民を襲うなんて、考えただけでも死にたくなるって言うのに」

「それでも、陛下が病でふせっておられる今、貴方を欠く訳にはいかないんですよ」

ヴェインが突き放すように告げる。

「そうだ。私に何かあった時に、玉座を空にする訳にはいかない。この国の玉座に勇者の子孫たる王が坐してこそ、リオノスと天空神の祝福が得られるのだ。かつて空位になった時、この国を飢饉が襲ったことを忘れるな」

王が弱々しい声で、しかし厳しく言った。

ここから見ていても顔色が冴えないのがよくわかる。杖をついて

体を支えても、座っているのがやっとといった風だ。外見から判断するに、彼はかなりの高齢だ。彼よりひと回りほど若い王妃が傍らで背を支えている。

「だからこそ、俺が行った方が早い。もう護衛がいらないとは言いません。ですから、俺自身に行かせてください！」

セリクは力強く言った。どれだけ理屈を並べても、彼は折れない。困ったその場の面々は、深奈に視線を向けた。突然大勢の視線にさらされ、深奈は困惑した。

そんな深奈をよそに、国王が静かに問いを発した。

「導き手どのはどうしたら良いと思われませんか？」

「え、わ、私ですか？ ええと……まだあまり事情がわからないんですけど、そこまで言うのなら行かせてあげたらいいんじゃないでしょうか？」

いきなりの問いにどう答えたら良いのか迷いつつも深奈は言った。先ほどから話を聞いていて思ったのは、セリクは絶対に意志を曲げないだろうなと言うことだった。それならば、やりたいようにさせてあげればいいのに、と深奈は軽い気持ちで思ったのだ。

「ほら、導き手もそう言ってることだし、俺は行きます」

深奈は味方を得たとばかりに言い放ったセリクを見ると、何やらウインクを返された。顔立ちが整っているので、妙に様になっているが、いい仕事をした言わんばかりの顔に呆れを感じた。

「でも……もし何かあったら」

王妃が不安そうに言う。

「危険なのは百も承知です。ですが、俺は勇者の子孫なんですよ？ 彼が魔王に挑んだ時のことを考えれば、俺の呪いなど大したことありません。この程度はひとりでも何とか出来なくては、彼の子孫を語れません、ましてや玉座になんか座れませんよ。」

この難題を解決してこそ、後嗣たる資格を得られるんでしょう？ アレフゲルダの予言はそう言ってる。俺は、出来る限りひとりで呪いに挑むつもりです。導き手が現れようがどうしようが、決して意思を変える気はありません！」

拳を固め、良く通る声で演説でもするようにセリクは言った。外見はクールな印象なのに、やたらと語りが熱い。深奈は呆気にとられつつも、彼の発言に引っかけかきを感じた。

ちよつと待ってよ、それだと私なんかいてもいなくてもいいって言ってるようなものじゃないの。

「おい、お前……導き手の力を全く借りずに何とかするつもりか？ 白鴉の予言には、導き手がお前の窮地を救うというものがあるんだぞ？」

第一王子のイーザが眉をひそめて問う。

「それは場所がわからなくて困ってるのを助けてくれるっていう意味でしょう。ですから場所だけ教えてくれればいいんですよ。俺は女子供の手は借りません。女子供は守り支える存在ですから」

「セリク様、それは確かに正しいですが、彼女は貴方の始祖たる勇

者を生んだ国から、リオノスによって呼ばれた方ですよ？ 普通の
女子供とは違います」

ヴェインが困ったように言う。

「そうかもしれないが、俺にはか弱い女にしか見えない。と言う訳
で導き手の方、場所をお教え頂きたいのだが？」

問われて、深奈は焦った。突然そんなことを言われるとは思って
も見なかったのだ。しかも、場所さえ教えてくれたら後は帰ってい
いと言わんばかりの態度に、腹立ちを覚えてもいた。せつかくやる
気満々でこちらへ来て、あちこち歩けると期待していたのに。
深奈は思わず眉間にしわを寄せて、セリクを睨むと言った。

「……かりません」

「何て言った？」

「わかりません！ ライオンにはこちらへ来れば気配で分かると言
われましたけど、まだ何にもわかりません！」

怒鳴るように言うと、周囲が静けさに包まれる。誰も何も言わな
いが、落胆の気配が漂っていることに、深奈は気づかずにはいられ
なかった。やがて、静寂を破ったのはセリクだった。

「お前、本当に『導き手』なのか？」

その言葉に、深奈の中で何かがぶちり、と切れた。

「『導き手』じゃなかったら何だって言うんですか？ 私が嘘をついているとでも？」

「あ……いや、そういう意味じゃ」

流石に失言に気づいたのか、セリクが焦ったように言う。だが、深奈は彼を睨んだまま、思いの丈をぶちまけた。

「私は私で理由があつてこちらに来ることを選びました。なので、いくら貴方が嫌だつて言つても意地でも助けません。どこまでも付いていきます。」

逃げたつて探し出してへばりついて行きますからね。私には健康がかかっているですよ、これからの人生人並みの健康体でいられるかどうかの正念場なんです、それだけは譲りませんっ！」

真っ向から、強い声で深奈は言い放った。ようやく掴めるかもしれない健康体をふいにしてたまるかという思いだった。

セリクは啞然とした様子で深奈を見たまま何も言わない。すると、弱々しくはあるが、国王が大きな笑い声をあげた。

「だそうだ、セリク。諦めろ、導き手どのは強い覚悟でここに来たそうだ。それから、先ほどの発言を謝れ。彼女は光と羽に包まれて現れた。導き手でなければ、そのような現れ方は出来ないだろう。何より、その髪と目が雄弁に語っているではないか」

「……しかし」

まだ納得のいかない風のセリクが何か言おうとしたとき、会議室の扉が薄く開いて、何かが凄く勢いで飛び込んできた。金色の塊のような何かは、深奈を指して飛んでくる。とっさに避けようとした深奈だったが、懐に感じたふわりとした感触に「あれ」と呟いた。良く良く見てみれば、それは背中に羽根の生えた仔ライオンだった。深奈はふと、寝台に横たわっていた時に自分を起こしたふわふわのことを思い出す。

あれはこの生き物だったらしい。
体毛はさらさらで、触れるとふんわり温かく、ミルクティーのよ
うな淡い亜麻色をしている。

自分の膝の上で、フウーンと鳴いて座り込んでしまったミニ翼獅子を困惑気味に撫でると、周囲からどよめきが起こった。

「これは凄い、モフォンがいきなり懐いておる。やはり、彼女は勇者を生んだ国の人なのだ」

「私たちには絶対に触れさせないというのに……なんて事だ」

国王とイーザが感嘆の思いをそれぞれ口にする。

深奈は、おっかなびっくり、そっと背中を撫でてあげると、ミニ翼獅子　モフォンは満足そうな泣き声を上げ、膝の上で丸くなってしまった。小さな羽根がぱたぱたと動いているのを除けば、ほとんど猫である。

深奈は、膝の上の生き物が自分の前に現れたライオンとそっくりなのを見て、これはどうということなんだろうと思った。

「あの、モフォンてこの子の名前ですか？」

「いえ、モフォンとは種族の名前です。あなたの前に現れたと言う聖獣リオノスの子どもだと言われていますし、別の説では、リオノスの使い、リオノスの聖なる力の結晶から生まれたなどとも言われています。基本的に北に広がるウェトシー王国との境にそびえるクールトネー山脈にある聖地、ダシエル山に暮らしているのですが、このモフォンは王子が生まれた際に、アレフゲルダと共にここにやってきて、以来ずっと住みついているのです。恐らく王子の呪いと関係しているのではないかと」

「単にちゃっかり居ついちゃっただけだろ」

懇切丁寧に説明してくれたヴェインの言葉を引き継ぐようにセリクが言うと、モフォンはそれまで眠そうにしていた目を大きく見開き、立ち上がると深奈の膝から飛び立つ。そのまま、セリクのところへ一瞬で近づくと、凄まじい速さで顔を三回引っ掻いた。

「うわっ！ 痛てて、やめろこのチビモフっ！」

「フシャー！！」

最後に後ろ足でセリクの頬にキックを決め、モフォンは再び深奈の膝へ戻った。

「……人の言葉が分かるんですね。この子」

「賢いんですよ、モフォンは。その子は比較的普通のモフォンですが、純白のモフォンは珍しく、人語を解して人に直接語りかける力があるそうですよ。間違ってもけなすようなことは言わないのが賢明です。と何度もご説明さしあげているのに、中々理解なさってくれない方がいますがね」

説明ついでに王子に嘆かわしげな視線を投げ、あからさまに肩を落とすヴェイン。それを見て、セリクは立ち上がった。

「もういいでしょう、俺の決意は変わりませんよ。護衛が付けられるくらいは甘んじますが、そいつを連れて行くのは嫌です。どうせ途中で根を上げて帰りたいだのこんなはずじゃなかったただの言いだすに決まってるんですから」

セリクはふんと鼻を鳴らし、出入り口へと歩きはじめる。

「こら！ 待つんだセリク！」

兄王子の制止にも立ち止まる気配はない。

膝にこの子がいなかったら引っぱたいてやるのにつ！

あまりの言い草に、比較的温厚な性質の深奈も怒鳴りたくなかった。けれど、膝にモフォンがいるので乱暴な動きをとることが出来ず、せめて怒りの声をぶつけてやろうと口を開いた時だった。突然モフォンが立ち上がり、ある一点を見つめて動かなくなったのである。

「え、なに？」

「モフ、フウ、フウ、フウ！」

モフォンがどことなく嬉しそうに鳴き声を上げる。その声に呼応するように、キインとガラスの碎けるような音がし、会議室の中央に光が出現した。その光の中にいたのは、深奈をここへ連れてきたライオンリオネス 翼獅子だった。

突然来訪した伝説の聖獣に、その場の人間たちはただ目をみはるばかり、しかも、国王はほとんど気絶しそうな有り様だ。出て行くうとしていたセリクも、驚いた様子でリオノスを眺めている。

全員の視線を受けたリオノスは、さしてそのことを気にするでもなく、物憂げに目を開くと一同を見渡して深奈に視線を合わせ、静かに口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9137z/>

呪われ王子と導きの娘

2012年1月5日01時01分発行